

曲目解説

今夜の演奏会の作曲家ロベルト・シューマン（1810～1856）は、もともとピアニストを志していたが、自己流の装置を使っての強引な練習の結果、1832年をはじめに、右手の薬指を演奏家として役立たぬほど痛めてしまった。そのことは、シューマンをそれまで以上に創作活動へと向かわせることになった。

作曲家としてのシューマンは、特定のジャンルに集中する時期をもつ傾向があった。若い頃のピアノの時期に始まり、歌曲、オーケストラ、室内楽というように進み、晩年に向かっては劇音楽へと興味が移っていった。

1848年、シューマンはバイロンの詩劇「マンフレッド」のために15曲の附随音楽を書いた。その初演が1852年にヴァイマルでリストによって行われた時、「オペラでもジグシュピールでもメロドラマでもない、音楽をもった劇的な詩であるということを聴衆に教えてほしい」とシューマンは言っている。その主人公マンフレッドは、奇怪な罪を犯して絶えざる煩悶のうちに世界を放浪して歩く厭世的な人物で、世界苦を一身に担ったような人間である。それをシューマンはひそかに自己と同一視していたと言われる。序曲はソナタ形式で書かれているが、時折の慰めをはさみつつ、苦悩と魂の戦いが嵐のように展開され、精魂尽き果てたように終り、標題音楽的雰囲気を持っている。「宏大な魂の絵画」と称され、この曲に感動したブラームスが最初の交響曲への情熱を燃やすこととなった。

指の故障のためピアニストへの夢を断念したシューマンではあったが、ピアノ曲は生涯にわたって作曲している。協奏曲についても早くから考えていたが、その最初の成果は、クララ・ヴィークとの結婚の翌年に作曲された「ピアノと弦楽器のための幻想曲」であった。その4年後1845年、メンデルスゾーンのピアノ協奏曲に刺激されて、ピアノ協奏曲の作曲を思い立ち、幻想曲に手を加えて第1楽章とし、第2、第3楽章を新たに作曲し、1845年7月31日に完成した。このシューマン唯一のピアノ協奏曲の初演は1845年12月4日に、クララの独奏、シューマンの親友フェルディナント・ヒラーの指揮で、ドレスデンで行われた。シューマンはこの曲について「交響曲と協奏曲とスケールの大きなソナタとの混成」と語っているように、当時のピアノ協奏曲としてはかなり異色の作品であった。その頃は、ピアノの華やかな技巧を誇示したものが好まれていたため、そうした要素を意識的に除いたシューマンの作品は、必ずしもすぐには受け入れられなかったが、クララが機会ある毎に紹介したため、やがてロマン派を代表する名曲として広く認められるようになり、他のロマン派の作曲家にも少なからぬ影響を与えた。

1840年、シューマンは、熱烈な恋愛をしていたクララとの結婚にやっとこぎつけることができた。そうしたシューマンの精神状態を反映したのか、それまでピアノ曲に集中していたところから歌曲の創作に集中し、次々と傑作を発表した。そこでこの1840年はシューマンの「歌曲の年」と呼ばれている。そしてその翌年1841年には、交響曲の創作に本格的に進出することになった。今夜演奏する第1番「春」は、1841年1月23日から26日の間にスケッチされ、2月20日までに全体が完成されている。シューマンの生涯の中で最も幸福な時期にあたっていたし、新しい年を迎えて希望に燃えていたので、そうした気分にあふさわしい交響曲が誕生したと言えよう。初演は1841年3月31日、ライプツィヒのゲヴァントハウスでのクララ・シューマンの演奏会でメンデルスゾーンの指揮により行われた。（初演後に大幅な改訂が行われ、今日普通に演奏されているのはこの改訂版である）そのときにクララは、夫シューマンのピアノ曲とショパンの短調協奏曲を演奏している。この演奏会は大成功で、シューマン夫妻にとって大きな満足感をもたらした。この曲は、アドルフ・ベトガーという詩人の詩に靈感を受けて書かれたとも言われて、各楽章にはそれぞれ「春のはじめ」「たそがれ」「楽しい遊び」「春のたけなわ」といった標題をつけたこともあった。シューマンは、メンデルスゾーンにあてて、「作曲当時に抱いていた春の憧れに似た気分を管弦楽で描いてみたかった」と述べている。